

建築教育ニュース

1985, 11

東日本建築教育研究会

## 目 次

1. あいさつ 会長 楠見善男 …… 1
2. 昭和59年度事業報告および会計（決算） …… 事務局 …… 2
3. 昭和60年度事業計画・会計（予算）および役員名簿 …… 事務局 …… 4
4. 昭和60年度総会・研究協議会報告 …… 大垣工高 滝本秀澄 …… 7
5. 研究発表概要 …… 関市立関商工高 大野充弘 …… 8
6. 福島県工高建築教育の概況について …… 福島工高 菊田 忠 …… 10
7. 愛知県における工高建築教育の概要 …… 愛知工高 稲葉 一 八 …… 13
8. 構造分科会報告 …… 主査 …… 田無工高 古谷 勉 …… 15
9. 計画分科会報告 …… 主査 …… 墨田工高 佐藤賢吉 …… 18
10. 施工分科会報告 …… 主査 …… 神奈川工高 山室 滋 …… 21
11. 製図分科会報告 …… 主査 …… 田無工高 赤地龍馬 …… 23
12. ニュース …… 28

あ と が き

## 1. あ い さ つ

会長 東京都立墨田工業高等学校長 楠見 善男

本年の6月7・8両日に岐阜県の高山市で行われた本会の総会並びに研究大会は、岐阜県のご関係者の周到なるご準備や運営と大会参加者の並々ならぬご熱意、そして飛弾の匠の作り出した高山の街の建築にとってこの上ない雰囲気相まって、名実具わる盛会でした。岐阜県のご関係者及び大会参加の各位に心からお礼を申し上げる次第です。

時に、つくばの科学万博に象徴されるように世はあげて情報化時代となり、わが校の志願者数などは、この2、3年電高建低となっています。何年か先を見通してとか、自分の心からやりたいことで進路を定める者より、今、世間で何が受けているかといったことで自分自身にとって一番大事なことを決めてしまう者が多いのは残念ですが、建築業界の今ひとつの好況化を、有力な援軍と願ってやみません。来春の卒業生に対する求人の申込状況や就職の決まり具合を見てそんな感じがしてならないのが私だけだったら幸いと思っている昨今です。

さて、豊かさが世に満ち満ちて、逆に「物より心」と言われることが多くなりましたが、具体的に「心」とは何ぞやと考えさせられてしまいます。そして、豊かだ豊かだと言われながら、その中での激しい生存競争は聞く程に見る程にすさまじいものようです。この競争社会に打ち勝って行けるような力がつくように生徒を育てて世に送り込む私たちの仕事も矢張り一種の競争社会かも知れません。そんなこんなを考えながら、建築だったら物より心の心とは、こんなではなからうかなと思いついたことを記してみたいと思います。

三次産業の割合が従事している人の数も生産額も6割を越したとか、純粋なサービス業もさることながらハードの中のソフト化も進んでいると言われていきます。使う人の心に訴えるようなもの（物）がハードにプラスされないと、豊かさの中での競争に負けてしまうようです。建築にたとえてみますと、方丈記の時代とは言わないまでも、雨露しのげばいい、住めさえすればいいという時代ではなくなりました。そして、機能的で快適であるということばかりでなく、住む人や中で働らく人や利用する人の心を満たすような、その建物に人が惹きつけられるようなプラスαが加わりたいものです。愚い、安らぎ、夢あるいはゆとり、誇り、他にない特質……そういったものが考えられ作られることによって、新たな需要が起こされ、ひいては建築科の振興にもつながるのではないのでしょうか。生活を楽しむよい時代に、生き残る道を探るのもまた楽し、というべきでしょう。建築物本来の機能性や安全性の向上、発達とか、新しい構造や工法あるいは新素材の研究開発とか導入とかの地味で重要な仕事に、色どりを添える意味での夢を楽しむことが「物より心」の心であり、それがまた活力を与えるビタミン剤になるのではないかと考えています。

最後に、東建研会員諸先生の一層のご発展、ご活躍をお祈りし、また日頃のお力添えに深く感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

## 2. 昭和59年度 事業報告

### 1. 総会・研究協議会

日時：昭和59年6月15日（金曜日），16（土曜日）

会場：岩手県盛岡市大通り3丁目「ホテル 東日本」 TEL 0196-2・2131

#### 1) 総会議事

ア) 昭和58年度 事業報告及び会計報告

イ) 昭和58年度 会計監査報告

ウ) 昭和59年度 役員改選

エ) 昭和59年度 事業計画及び予算案審議

オ) その他

#### 2) 講演会 東北大学教授 山内和夫氏・・・「雪と建築」

#### 3) 研究協議会（全体会）

研究発表 1：社陵高等学校教諭 鈴木善治氏

「工業基礎をどのような計画のもとにどのような内容で指導したか。」

研究発表 2：久慈工業高等学校教諭 松本元治氏

「工業数理における一考察について。」

研究発表 3：弘前工業高等学校教諭 古跡昭彦氏

「パソコンについての実践報告。」

映画発表：田無工業高等学校教諭 古谷勉氏

「躍進田無工高一卒業生はいま・・・」

#### 4) 研究協議会（分科会）

ア. 製図分科会：建築製図の学習指導について。

イ. 計画分科会：建築計画の学習指導について。

ウ. 構造分科会：建築構造・建築設計の学習指導について。

エ. 施工分科会：建築施工の学習指導について。

### 2. 講習会・・・日時：昭和59年8月1日（水曜日），2（木曜日），3（金曜日）

内容：建築施工実習研究協議会（第4回）

### 3. 第3回製図コンクール・・・11月（応募数301）

### 4. 工業標準テスト：会長，墨田工，田無工，大宮工，安田学園

### 5. 建築教育ニュース1984号11月発行：その他常任理事会，委員会等

# 昭和59年度 会計決算報告書

下記のとおり報告いたします。

会 長 楠 見 善 男  
会 計 事 務 局

## 1. 収 入 額 1,048,526円

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減 額	摘 要
会 費	700,000	705,000	5,000	141校分
雑 収 入	28,213	23,399	△ 4,814	助成金2万円, 銀行利子
印 税	40,000	38,340	△ 1,660	基礎問題, 図集
賛助会補助	150,000	150,000	0	
繰 越 金	131,787	131,787	0	
合 計	1,050,000	1,048,526	△ 1,474	

## 2. 支 出 額 1,002,204円

項 目	予 算 額	決 算 額	増 減 額	摘 要
1) 事 業 費	810,000	793,800	△ 16,200	
総 会 費	340,000	327,850	△ 12,150	会場校補助, 本部経費
資 料 費	150,000	135,950	△ 14,050	資料, ニュース等印刷費
講習会補助	60,000	60,000	0	施工研究協議会補助
出張補助費	100,000	110,000	10,000	西日本・盛岡出張費等
分科会補助	160,000	160,000	0	4分科会 各4万円
2) 運 営 費	223,000	194,054	△ 28,946	
役員会合費	18,000	18,000	0	理事会, 主査会各6回
通 信 費	120,000	99,580	△ 20,420	総会通知, ニュース発送等
雑 費	20,000	11,474	△ 8,526	事務用品代
事 務 費	15,000	15,000	0	事務局手当て
準 備 費	50,000	50,000	0	名簿積立金
3) 予 備 費	17,000	14,350	△ 2,650	
4) 合 計	1,050,000	1,002,204	△ 47,796	

3. 差 引 残 高 46,322円 収入減 1,474円  
支出減 47,796円

4. 次年度繰越金 46,322円

会計監査の結果, 収支, 帳簿等相違ないことを認めます。

昭和60年3月31日

会 計 監 査 堀 越 喜 与 志  
加 藤 尚

### 3. 昭和60年度事業計画

#### 1. 総会・研究協議会

日時 昭和60年6月7日（金曜日）・8日（土曜日）

会場 高山市昭和町1 高山市民文化会館

##### 1) 研究協議会（分科会）・・・第1日目

ア. 製図分科会：建築製図の学習指導について。

イ. 計画分科会：建築計画の学習指導。

—建築法規演習課題検討—

ウ. 構造分科会：「パソコン導入による諸問題・実践指導」

エ. 施工分科会：「施工実習の学習指導について

—夏季施工実習研究協議会の実践を通して」

##### 2) 研究協議会（全体会）・・・第2日目

研究発表 熊谷工業高等学校・・・関田 毎吉 先生

「工業基礎の授業について。」

研究発表 「建築系技術者に必要な実習内容に関する調査のまとめと分析。」

研究発表 「パソコンを利用した教育内容と、その指導について。」

#### 2. 夏季講習（定員40名）

日時：昭和60年8月1日（水曜日）～3日（金曜日）

内容：建築科目の指導に関連するパソコンの実技演習（東京）

#### 3. 常任理事会・委員会等（年5～7回）

1) 常任理事会：会長・副会長・事務局長・分科会主査・代表理事若干名

2) 主査会：会長・副会長・分科会主査

3) 分科会：分科会主査・学校代表委員若干名

4) 教材委員会：委員長・副会長・委員若干名

5) 製図コンクール運営委員会：委員長・副会長・委員若干名

6) 工業標準テスト問題作製委員会：会長・委員4名

7) 編集委員会：委員長・副会長・委員若干名

4. 刊行物・・・建築教育ニュース：1985年11月

5. 製図コンクール（第4回）・・・1985年11月

## 昭和60年度 予 算

### 1. 収 入 額 1,010,000円

項 目	予 算 額	摘 要
会 費	720,000	144校分
雑 収 入	23,678	助成金, 銀行利子等
印 税	40,000	基礎問題, 図集等
賛助会補助	180,000	
繰 越 金	46,322	昭和59年度繰越金
計	1,010,000	

### 2. 支 出 額 1,010,000円

項 目	予 算 額	摘 要
1) 事 業 費	770,000	
総 会 費	320,000	会場校補助12万, 本部経費
資 料 費	150,000	総会資料, ニュース等印刷費
講習会補助	40,000	夏期講習会補助費
出張補助費	100,000	西日本・北海道出張補助
分科会経費	160,000	4分科会各4万円
2) 運 営 費	223,000	
役員会議費	18,000	理事会, 主査会等年18会
通 信 費	120,000	総会通知, ニュース発送通信費
雑 費	20,000	事務用品代等
事 務 費	15,000	事務局手当て
準 備 費	50,000	名簿作製積立金(計10万)
3) 予 備 費	17,000	
4) 合 計	1,010,000	

#### 事務局および銀行口座代表名

昭和59年6月16日以降, 事務局(当番校), 銀行口座代表者名が下記のとおり  
 ですので, 宜しくお願い申し上げます。

★事務局 東京都立墨田工業高等学校建築科(事務局長 井 上 満)

江東区 森下5-1-7 TEL 03-631-4928

★銀行口座 第一勧業銀行 芝支店 普通口座 054-1224173

「東日本建築教育研究会 代表 楠 見 善 男」

## 昭和60年度 役員名簿

- |                 |                    |       |              |
|-----------------|--------------------|-------|--------------|
| 1. 校長           | 東京都立墨田工業高等学校       | 校長    | 楠見善男         |
| 2. 副会長          | 東京都立墨田工業高等学校       | 教諭    | 井上満          |
|                 | 東京都立小石川工業高等学校      | 教諭    | 堀越喜与志        |
| 3. 事務局長         | 東京都立墨田工業高等学校       | 教諭    | 井上満          |
| 4. 会計監査         | 千葉県立市川工業高等学校       | 教諭    | 菅野昭雄         |
|                 | 川崎市立工業高等学校         | 教諭    | 加藤尚          |
| 5. 常任理事         | 楠見善男(会長)           | 井上満   | (副会長)        |
|                 | 赤地龍馬(製図主査)         | 佐藤賢吉  | (計画主査)       |
|                 | 古谷勉(構造主査)          | 山室滋   | (施工主査)       |
|                 | 古賀昌之(東工大附属工)       | 太田尚   | (都立 蔵前工)     |
|                 | 松本延夫(都立 葛西工)       | 梅田次郎  | (都立 田無工)     |
|                 | 小野幹郎(東京工業高)        | 安藤充浩  | (安田学園高)      |
|                 | 白石四郎(千葉 市川工)       | 関田每吉  | (埼玉 熊谷工)     |
|                 | 落合弘(神奈川 藤沢工)       | 佐藤克己  | (神奈川 横須賀工)   |
| 6. 分科会委員        |                    |       |              |
| 1) 製図分科会        | 主査 赤地龍馬(都立 田無工)    |       |              |
|                 | 古賀昌之(東工大附属工)       | 諏佐真一  | (都立 田無工)     |
|                 | 土田裕康(都立 蔵前工)       | 遠藤勇   | (東京工業高)      |
|                 | 塩沢泰(関東第一高)         | 角田勝男  | (神奈川 向の岡工)   |
|                 | 加藤尚(神奈川 川崎市立工)     | 酒井健一  | (神奈川 神奈川工)   |
|                 | 高橋義治(千葉 市川工)       | 落合弘   | (神奈川 藤沢工)    |
| 2) 計画分科会        | 主査 佐藤賢吉(都立 墨田工)    |       |              |
|                 | 門馬進(東工大附属工)        | 安藤充浩  | (安田学園高)      |
|                 | 大本橋正俊(都立 葛西高)      | 大間俊彦  | (関東第一高)      |
|                 | 本田友一(埼玉 川越工)       | 田中良司  | (埼玉 川越工)     |
|                 | 山県慶三(神奈川 神奈川工)     | 大庭孝雄  | (神奈川 小田原城北工) |
| 3) 構造分科会        | 主査 古谷勉(都立 田無工)     |       |              |
|                 | 栗原博(東工大附属工)        | 堀越喜与志 | (都立 小石川工)    |
|                 | 井上満(都立 墨田工)        | 遠山時幸  | (安田学園高)      |
|                 | 佐久間一(千葉 市川工)       | 佐藤功   | (埼玉 川越工)     |
|                 | 池田幸正(神奈川 川崎市立工)    | 仲田治喜  | (神奈川 鶴見工定)   |
| 4) 施工分科会        | 主査 山室滋(神奈川 神奈川工定)  |       |              |
|                 | 奥田幸司(都立 小石川工)      | 高橋康宏  | (都立 葛西高)     |
|                 | 小野幹郎(東京工業高)        | 田島昇   | (埼玉 春日部工)    |
|                 | 大沢二郎(埼玉 川越工)       | 山崎敏弘  | (神奈川 向の岡工)   |
|                 | 村上竹久(神奈川 藤沢工)      | 佐藤克己  | (神奈川 横須賀工)   |
|                 | 塩山昇(埼玉 熊谷工)        | 土屋健   | (山梨 甲府工)     |
| 7. 教材委員会        | 委員長 白石四郎(千葉 市川工)   |       |              |
|                 | 井上満(副会長)           | 佐藤賢吉  | (計画主査)       |
|                 | 赤地龍馬(製図主査)         | 山室滋   | (施工主査)       |
|                 | 古谷勉(構造主査)          |       |              |
| 8. 編集委員会        | 委員長 堀越喜与志(都立 小石川工) |       |              |
|                 | 古賀昌之(東工大附属工)       | 松本延夫  | (都立 葛西高)     |
|                 | 池田幸正(神奈川 川崎市立工)    |       |              |
| 9. 製図コンクール運営委員会 | 委員長 赤地龍馬(都立 田無工)   |       |              |
|                 | 副委員長 白石四郎(千葉 市川工)  |       |              |



## 4. 昭和60年度 総会・研究協議会報告

岐阜県立大垣工業高等学校 滝本秀澄

日時 昭和60年6月7日(金)～8日(土) 参加者：153名

会場 高山市民文化館（岐阜県高山市）

### (1) 総会議事

(ア) 昭和59年度事業報告および決算報告

(イ) 会計監査報告

(ウ) 役員改選

(エ) 昭和60年度事業計画および予算審議

(オ) その他

### (2) 研究協議会（分科会）

#### 議題

製図分科会＝建築製図の学習指導について

構造分科会＝パソコン導入による諸問題－実践指導

施工分科会＝施工実習の学習指導について－夏季施工実習研究協議会の実践を通し

計画分科会＝建築計画の学習指導－建築法規演習課題の検討

### (3) 研究協議会（全体会）

(ア) 分科会報告

(イ) 質疑

### (4) 諸連絡

### (5) パソコン実演

(ア) 住宅平面カラーエスキス (ロ) 理想的なプランニング (ハ) トランシット測量面積計算

(ニ) 昼光率のドーム実験 (ホ) 照度分布理論 (ヘ) 透視図 (ト) 静定ばり (チ) カーテン・ルー

バーの自動開閉装置 (リ) 積算の演習とチェック

### (6) 研究協議会（全体会）（6月8日）

(ア) 研究発表

工業基礎の授業について

建築系技術者に必要な実習内容に関する調査のまとめと分析

パソコンを利用した教育内容とその指導法について

(イ) 質疑

### (7) 講評・謝辞

### (8) 視察研修 陣屋一日下部邸－獅子会館

## 5. 研究発表概要

— パソコンを利用した教育内容とその指導法について —

関市立関商工高等学校 大野 充弘

### 1) 研究テーマの設定について

昨今の半導体技術、集積技術の発達と低価格化は驚くべきものであり、それによりマイクロエレクトロニクスの応用技術を著しく進歩させ、その代表的なコンピュータは飛躍的な性能向上、低価格化、応用技術等とあいまって、社会生活のあらゆる部門に拡って日常生活や経済に大きな影響を与えています。

岐阜県内の工業高等学校にも多数のパソコンが導入され、「工業基礎」に供するのは勿論のこと、工業数理の学習にも利用され、更にC A Iの教育が可能になるようにソフトウェア、ハードウェア両面での開発が進みつつあります。

その現状から、昭和59年4月に、岐阜県高等学校教育研究会工業部会の研究主題である「エレクトロニクスに関する技術を取り入れた教育内容の研究」をうけて、岐阜県の建築科・設備工業科分科会においても、研究テーマを「パソコンを利用した教育内容とその指導法について」と題して研究に着手し、ソフトウェア中心に、その開発について研究して行こうとの方針を立てました。

### 2) 研究の集め方

岐阜県内の建築科、設備工業科より、代表の委員1名づつを選出し、幹事1名を加えた計10名で、パソコン利用に関する研究会を組織し、これが推進母体となって、研究を進めることにしました。

3回の研究会および、その後の意見交換により、取りあえず、身近に対応できるものから取り上げていくこととし、大きく次の3つの分野に集約出来るのではないかと考えました。 A) 構造編 B) 計画編 C) C A I編

### 3) 各校より提出された研究内容

#### A) 構造編

固定法による応力計算、建築設計基本プログラム、静定ばりの解法、積算の演習とチェック。

#### B) 計画編

日影図作成プログラム、理想的なプランニング、透視図の作図、建築計画実習におけるデータ処理（昼光率、照度分布、音圧レベル）、カラーグラフィックによるパソコンの興味づけ、住宅平面カラーエスキス、測量実習（トラバース測量面積計算、水準測量）X-Yプロットによる作図実習の基礎、住宅平面図、カーテン・ルーバーの自動開閉装置。

### C) C A I (Computer Assisted Instruction)

教育機器としてのパソコンの利用（冷凍サイクル，シーケンス制御），電気基礎模擬試験，建築設計学習プログラム，水準測量用C A I，断面の性質C A I，冷房負荷計算。

## 6. 福島県工高建築教育の概況について

県立福島工業高等学校 菊田 忠

今回は福島県の高校建築科の概況をお知らせします。建築科設置の高校は、いわき地区に県立勿来工高、県南地区に県立郡山北工高と日大東北高、県北地区に県立福島工高と福島高、会津地区に県立会津工高、現在公立4校私立2校の計6校です。以下各校毎にその特色等を紹介いたします。

県立会津工高、創立は明治35年、福島県唯一の工業学校として発足した。創立当初は、染織・漆工・窯業の三科からなり、郷土の伝統産業に根ざし、地域社会の要請に応じて誕生した。建築科は昭和23年の学制改革により、校名が県立会津工業高校と改称されるに伴ない、県立若松工業学校（現在の県立若松商業高校）建築科を本校に移管増設されて、新しく出発した。本校の歴史は今年で83年を数えるが、学科は8学科、生徒数1300を数えるまでに発展した。建築科は今年で37回の卒業生を送り出している。学校は会津若松市のほぼ中央部、会津鶴ヶ城郭に接しているが、近隣に飲食街があり教育環境としては必ずしも良いとは云えない。昭和37年より増改築に着手し、20年がかりで木造校舎を鉄骨・鉄筋構造に衣更えした。現在、旧講堂と実習室の二棟だけの木造校舎が残っている。生徒の気風は会津魂を基調に、雪国らしい我慢強さと質実さを培うように努めている。進路状況は30%が進学希望で、残りは就職うち半数は地元企業を目指しているが、地元では受入れがむつかしく、約70%が県外に就職するのが実状である。地元就職希望のなかには止むをえず建設系以外の企業に就職する者が毎年増えつゝある。

県立福島工高、昭和23年福島県立信夫高等学校（農業、家庭科）に定時制の工業科として発足、昭和24年建築科新設、昭和32年福島県立福島工業高等学校と校名を改称現在に至った。福島県高校入試は県下の職業高校では上位であり、部活動が盛んでバレー、卓球、スキー、重量挙げはインターハイ全国大会出場、通学区域が広範囲で二市二郡、44の中学校より入学している。昭和59年度の進路状況は就職82%、進学18%、生徒はすなおであるが活気がない。学校は県庁所在地である福島市の西北に位置しているが近年国道13号信夫山トンネルの開通、国鉄福島駅西口の開設、新幹線の開通などにより街の発展もめざましく、市の中心となりつゝあり、加えて大都会の風潮をもろに受けるようになった。福島市は県の北端にあり、各種官公署及びその出先機関、各企業の支店、出張所等が多い。大学2校、短大3校、その他各種学校が数多くあり、政治、文教の中心となっている。

県立郡山北工高、福島県の中心部安積平野に位置し、西の会津と太平洋沿岸の地域を結ぶ交通の要点郡山市は、人口30万をこす活気ある経済都市である。この郡山市には、昭和19年に創立された郡山工業高校と昭和38年にできた郡山西工業高校の2校があったが、県の統合移転計画により理想的な工業高校の建設を目指して、市北部の広大な敷地に新校舎

の建設工事が始まり、昭和52年4月から、校名も郡山北工業高校として誕生した。文化の創造と、社会の発展とに貢献しうる心身ともに健康な中堅工業技術者を育成することを教育目標とし、「調和・創造・特色」の3つの校訓をかかげ有能な産業人の育成をめざし努力を続けている。また、スポーツを奨励し、部活動を活潑にすることを教育方針ともしており、運動場も約40,000㎡あり、専用野球場と400トラック、サッカー、ソフトボール、テニス用グラウンドなどを有し、屋内施設でも、体育館、格技場、合宿所のほか、昨年第2体育館が完成するなど整備されている。このため各種大会での活躍が目立ち、特に野球部は、昭和53年、第60回大会に甲子園出場を果たし、念願の1勝をかちとった。また昭和55年の全国高校大会には、4つの部が出場するなど大いに成果をあげている。

県立勿来工高、昭和33年磐城農業高校に機械科が新設されたことに始まり、昭和36年勿来工業高等学校として独立、今年で創立25年を迎えることになりました。機械科、電気科工業化学科、電子科、建築科の5科、生徒数1125名（女子181名）を有する大規模校である学校は常磐線植田駅徒歩15分大平洋を望む気候温暖で閑静な住宅地に位置している。建築科では木造建築物の基礎的なものより反復指導、個別指導に重点をおき鉄骨造、鉄筋コンクリート造の基礎的知識を理解させ理論的学習はもとより、体を動かして汗を流す実践的総合学習まで幅広く体験させております。資格取得では、ガス溶接をはじめ、本県独自の建築技術検定試験（県教研工業部会主催）において多数の合格者がでるよう努力しております。進路も建設業界の低迷を反映し、大学、専門学校への進学希望者も多く全員が希望する進路にいかれるよう教職員一同頑張っております。

日大東北高、郡山市の南方、阿武隈川の堤防に接し、約11万坪に及ぶ広大な敷地に、日本大学工学部と併設されている。昭和26年、建設・機械・電気・工業化学の工業科と普通科を併わせての5学科を持つ日本大学東北工業高等学校として創立した。昭和37年、建設科を廃止、土木科と建築科を置いた。昭和53年、普通科の学級増に伴い、校名を日本大学東北高等学校と改めた。学級編成は、土木科1、建築科1、機械科2、電気科2（電力電子）工業化学科1、普通科6の各学年13学級から成っている。生徒数は1840名に及んでいる。進学については普通科では75%、工業科では13%であり進学者の半数が日本大学に進学している。建築科においては、10~20%が大学・専門学校へ進学、就職希望者の10%は県外希望で残りは地元を希望している。“建築への興味をもたせる。”“木造住宅のマスター”の2点を科の指導目標としながらも不況のせいか建築以外の職種を求める傾向もある。

福島高、福島県の県北福島市信夫山公園の山裾で景美に恵まれた環境のよい位置に校地14500㎡校舎8500㎡からなる近代的校舎を持つ学校で、創立は昭和17年に福島電気工業学校として、電気科を設置し発足する。その後、2回ほど校名の変更並びに科の増設などがあり、学校法人電気学園福島高等学校として、全日制電気、電子、建築、土木、商業、普通科、30学級を有し、生徒数1337名が在籍している。本校の特色は、校訓である、誠

実、礼節、規律のもとに、職業科は、勤勉で創意と協調性のある職業人の育成に心掛け、中堅技術者として、業界に貢献できるような有用な実践教育の指導をしている。その方策の1つとして、資格試験の参加奨励をしており、電気工事士、高圧電気技術者、危険物取扱者、ラジオ音響技能検定資格試験等に多くの生徒が受験、多数の合格者をだしている。部活動は空手道、相撲が特に秀れ、東北大会並びに全国大会に出場を重ねている。

## 7. 愛知県における工高建築教育の概況

県立愛知工業高等学校 稲葉 一八

愛知県の建築科設置の工業高校は、昭和30年代末までは、愛知工高、市立工芸高、名古屋工高、豊橋工高の四高でしたが、その後一宮、碧南、半田、佐織の各工高に建築科が設置されました。本県建築科の教職員は、年3回の県工研建築部会研究会や夏の実技講習、見学会を通じて、各校互いに情報交換をしながら建築教育に取り組んでおります。

以下各校でその特色等を執筆して頂きましたので、建築科の設置順に紹介します。

県立愛知工高 — 明治34年に染織、図案科の2科で愛知県工業高校として開校し、昭和19年図案科を建築科に変更し、建築科第1回卒業生を昭和21年に世に出しております。

現在は、建築土木科として80名が入学し、2年進級時に建築科、土木科各1クラスに分かれます。従って1年時には、建築土木に関する共通基礎科目を学習し、建築専門科目は2年時以降、製図、設計、実習に重点を置いて学習します。東海地方4県を中心に建築関連業界において多くの卒業生が活躍しております。

県立第二愛知工高 — 全日制的愛知工業高校から昭和47年独立した夜間定時制高校です。現在、建築科の生徒数は各学年10数名です。昼の仕事を終え、低学年は自転車、バイクでかけつけ、高学年になると自動車も混ってくる。建築科としては、次の3点を指導目標としている。

1. 住宅を理解し、計画出来るようにする。
2. 図面を読んだり、かいたり出来るようにする。
3. 二級建築士試験問題程度の学力を身につけさせる。

名古屋市立工芸工高 — 大正6年創設、建築科は図案科の中に大正11年建築分科として設置、昭和5年に独立しました。開校以来製図教育に力を注ぎ、現在もその伝統を守り、パースの着色などに力を入れ、用紙の統一化、課題の細分化、家庭課題と学校課題の分離、早朝、授業後の指導、提出日厳守などに取り組んでおります。また、選択（3年時6単位）において、製図、構造計算、演習を実施し、コンペ、パース、設計課題、構造計算例、就職試験、2級建築士試験などにもある程度対応できるように指導しております。

名古屋市立工芸工高定時制課程 — 本課程は働きながら学ぶ勤労青年に対し教育の機会均等を保障し、高等普通教育及び工業に関する専門教育を実施して、地域社会に直結する有為な中堅技術者の養成を目標としており、建築科においては、住宅からビルまでの建築計画、製図、構造設計等について基礎的専門技術を習得させている。クラブ活動においては、全国定通軟式野球大会に出場する等スポーツにも力を注いでいるが近年の生徒数減少により昭和61年度をもって定時制課程は廃止される。

私立名古屋工高 — 昭和4年全国でも稀な私学甲種工業校として創設。以来50余年卒業生は4000人を超え、官公庁、建設業界で活躍し建聖会員（同窓会）として絆が強い。本

校は高辻に有り知名度高く、業界不振の際も求人多数で就職の心配は無い。また、進学者も10数名ある。最近、家庭での子弟の躰が不十分であるが、社会は中卒者に代る勤労者として高卒者を求めているので、名工高における三ヶ年では徹底的に生徒を鍛練し、行儀・正義感・公共心・創造と勤勉の精神を涵養し、模範的な弱年層の社会人育成を期している。

県立豊橋工高 — 昭和19年豊橋市立工業学校が創立されて以来、温暖な東三河に位置し、東の工業教育の中心として昭和59年4月で満40年を経過しました。この間卒業生は1万2千有余名で県内、特に東三河の工業界の中心として活躍しております。創立当初は、3学科で発足し、昭和23年には4学科と夜間1学科を設置し、その後5学科10クラス編成の大世帯となりましたが、現在は6学科8クラスであります。建築科は設計製図を通して地元の要望にこたえるよう体を動かすことを厭わぬ人間重視の教育を進めております。

県立一宮工高 — 昭和38年4月開校、人口25万の繊維産業都市である一宮市に、普通高、商業高に次いで開設された基幹工業高校。機械科3、電気科3、土木・建築各1クラスの編成である。校歌に「この手を信ず」とうたわれるように、信頼される技術を身につけた、しなやかな、たくましい技術者を社会に送り出すことを目標にしている。建築科の卒業生は、近年、進学をする者が多くなっているが、それでも地元の中堅企業を中心に就職し、建設業界で多くの卒業生が活躍している。

県立碧南工高 — 昭和48年に碧南高校の機械科を母体に、建築科と全国で唯一の環境工学科そして、電子工学科の4学科7学級からなる工業高校として創立しました。愛知県の西三河の南部に位置し、衣浦湾に面しております。建築科の特徴としては実習に力を入れており、マイコン実習を初め、溶接実習など幅広い実習を心がけています。就職先は地元の建築関連会社を初め、地元の大工希望が多いのが特徴であります。また本校も多様化の波には勝てず、建築ばなれも生じているのが現状であります。

県立半田工高 — 昭和38年に創立され、昭和49年に土木、建築の2科が増設されました。建築科では、中堅技術者として活躍できるために、建築技術の基礎的理論を充分に理解させると共に実験実習、製図を通じて実技的な技術の修得をめざして、造形実習など基礎的学習の上に、創意工夫と応用の力を養い、積算技術の力も養っている。また在学中取得可能な資格についても出来るだけ取得する方向で指導しています。卒業後は、地域社会への就職を主体に、官公庁、建設、設計会社及び一般企業への道をとる者もおります。

県立佐織工高 — 創立は昭和51年、機械、繊維、色染化学、電子工学の4科5学級で発足、昭和52年には建築科1学級の増設となった。製図、実習に力を注いでおり、製図は第3学年で二級建築士の課題に取り組みせ、確認申請書を添えて提出させている。実習は第1学年で測量一般、第2学年で材料実験、透視図の添景物、マガジンラックの製作、第3学年で溶接、鉄骨の現寸図、加工、組み立て、標準貫入試験、ブロック積み、足場組み立て、建築測量、照明・音響実験、マイコン、振動実験などに取り組みさせている。



## 8. 構造分科会報告

都立田無工業高校 古谷 勉

昭和59年9月から60年8月までの1年間の構造分科会の活動状況の概略を報告します。

9月 9, 3 59年度第2回構造分科会委員会（小石川工高）。

○ 60年度総会において、4分科会が統一テーマに基づいて研究協議するために必要なアンケート調査の内容と実施について検討が行なわれた。

①科目と指導内容（項目）とその指導時間の調査について

②法規と各科目との関連について

○ 60年度夏季研究協議会の実施案についての検討をすすめ、パソコンに関する研修会を3日間くらいで行なうことに賛成した。実施に当っては、構造分科会委員会としてバックアップすることを決定した。

○ 59年度総会（岩手大会：盛岡）で発表した「パソコンプログラム集」を若い実務家のために、「建築士と実務」（オーム社）の付録として記載させてほしいというオーム社からの依頼を承認した。

11月 11, 13 59年度第3回構造分科会委員会（小石川工高）

○ パソコンプログラム集〈第2集〉の発行へ向けて取り組むことを決定。なお、一部の委員に負担が集中する恐れがあり、それをどう解決するかが問題となった。

○ 関連して、「構造力学」のプログラム化（系統的に）をすすめるプロジェクトチームをつくるよう提案があった。

○ 第2回の委員会に引き続き、60年度夏季研究協議会および法規と各科目との関連について、その細目を検討した。

○ 構造分科主催としての見学会や講習会のあり方について意見交換を行なった。

<昭和60年>

2月 2, 19 59年度第4回構造分科会委員会（小石川工高）

○ 60年度総会において、4分科会が統一テーマで行なうためのアンケート調査は中止となり、それを受けて、構造分科会の研究協議内容についての検討が必要となった。なお、構造分科会の研究協議会では「必ず具体的な実践レポートを用意し、理論的な意見交換のみに終ることのないようにする」ということを確認した。

○ 60年度夏季研究協議会の実施運営委員会に主査+2委員の3名が運営委員として参加することに決定した。

- 5月 5, 31 60年度第1回構造分科会委員会（小石川工高）。
- 60年度総会における構造分科会は、「パソコン導入による諸問題」（田無工高：古谷）についての実践報告を行なうことを決定した。
  - パソコンによるプログラム集の第2集，第3集を発行するために，総会時の構造分科会で，プログラムの提供を呼びかける。
  - 60年度構造分科会委員会の活動方針についての意見交換を行なう。
- ①作成したプログラムを「勉強しない生徒や理解力の乏しい生徒」にどう使うか明確にした上で，“建築設計の教科書に沿って，プログラム化”をすすめる。まず，各委員が建築設計のプログラム化の意義を十分に理解するためにプログラムの具体的活用法の事例研究を行なうことを決定した。
- ②教科書「建築設計」の第1章“建築設計のあらまし”の指導法についての具体策の検討が必要であるという意見があった。
- ③本委員会の活動は，建築構造に関連する科目の「指導法」や「調査」に視点を当てていくことを基本とすることを了解した。

- 6月 6, 7 昭和60年度総会・研究協議会（岐阜県高山市で）。
- 構造分科会出席者は40名。
  - 配布資料：「パソコン導入による諸問題」
  - 当日会場でアンケート調査を実施した（回答者は32名）。下記に，その結果を報告する。
- ①昨年度，構造部会から発行したプログラム集について
- プログラム集を

見たことがある	見たことがない	学校にあるかどうか知らない
14名 (43.8%)	12名 (37.5%)	6名 (18.7%)

内容を調べた	内容まで調べていない
6名 (42.9%)	7名 (50%)

← 無回答，1名 ← 「見たことがある」先生のみ回答

実際の授業で活用した	実際の授業で活用していない (4名)
2名	<ul style="list-style-type: none"> <li>← 「内容を調べた」先生のみ回答</li> <li>パソコンがない (1名)</li> <li>パソコンはある (3名)</li> </ul>

- 他の先生が、プログラム集を使っているのを

知っている	知らない	無回答
6名 (18.8%)	23名 (71.9%)	3名

- 今後、プログラム集の第2集、第3集を発行する予定ですが、

必要と思う	わからない	無回答
23名 (71.9%)	3名	5名

- 「プログラムを提供してもよい」とお考えの先生：0

- その他

- ・プログラム集のねらいがわからない。
- ・プログラム集を見てみたい。
- ・情報処理教育は工業基礎や工業数理で扱うべきだと思う。
- ・パソコンの管理が大変である。

② 構造分科会に対する意見や希望について

- 断面設計に関するソフトの開発ができればよい。
- 建築構造や建築設計とパソコンとのかかわり、特に授業として利用する場合、その是非についての発表、協議があればよい。
- 生徒が言語学習（ベーシック、フォートラン）やワープロ学習によって生じる問題点などを知りたい。
- 建築におけるBASIC文法を中心とした「情報技術教育基礎」ともいうべきテキストがほしい。  
(各学校で使用しているテキストを集め、一冊の本にしてほしい)
- 今回の「パソコン導入による諸問題」は、特に構造分科会で取りあげる問題でもないように思う。本来の建築構造の指導法などを取りあげてもらいたい。

(各県の情報交換ができる議事運営を期待したい)。

なお、先に配布したパソコンプログラム集は先生方によって加筆され、月刊誌「建築士と実務」(オーム社)の10月号(60年10月1日発行)の別冊付録「建築を学ぶためのパソコンプログラム・アラカルト」として発表されます。

## 9. 計画分科会報告

東京都立墨田工業高等学校 佐藤賢吉

昭和60年度、計画分科会研究活動の主題は、昨年度に続いて建築法規の指導について、(法規演習課題の研究)とした。計画分科会委員会を中心に研究協議を重ねた結果、第1章：建築法規のあらまし。第2章：単体規定、第3章：集団規定の3章からなる演習課題につき「建築法規演習書」形式としてまとめることにし、現在中間まとめの段階である。

本ニュースにおける分科会報告では、このことについて第35回総会(岐阜・高山大会)・研究協議会における記録をもとに述べることにする。

### Ⅰ 研究協議会(計画分科会)

日 時：昭和60年6月7日(金)

会 場：高山市民会館

司 会：間宮(小石川工) 座 長：佐藤(主査・墨田工)

- 1) 研究活動の経過報告と議題の主旨説明
- 2) 研究協議

「議 題」建築法規演習課題について

演習課題6項目(①居室の採光規制、②構造強度(木造)、③建ぺい率規制、④容積率規制、⑤高さの規制、⑥日影の規制)について「建築法規演習書」形式にまとめることにした。

ここでは、その目次案と内容の一部を発表させていただきます。

### 〔目 次〕

第1章：建築法規のあらまし

1. 建築基準法
2. 建築基準法関係の体系
3. 建築基準法の構成
4. 建築基準法施行令の構成

第2章：単体規定

1. 建築基準法「第2章」 演習1・居室の採光規制  
演習2・構造強度(木造)の規制

第3章：集団規定

1. 建築基準法「第3章」 演習3・建ぺい率規制  
演習4・容積率規制  
演習5・高さの規制  
演習6・日影の規制

### 〔内容構成〕

①目的……演習課題の目的を提示する。②資料……施行令等関連部分を図解等でまとめ

て提示する。(例題による解説をできるだけとり入れる。)

③問題解答演習書の形式

問題解答演習書

問題番号	1・2番	年	月	日	曜日	班	年	組	番
場 所		時間	～		氏名				
関連法規等	敷地面積（施行令第2条第1項第1号），道路の定義（法第42条第1項・2項・3項），その他必要に応じて文章等で記入させる。								

(問1の解)

(問2の解)

(B5サイズ)

生徒の感想	建ぺい率を学習するために、敷地面積の計算はもちろん道路との関係が大変重要であることがわかった。ふだん、あまり関心をもっていなかったが、演習をやってみて複雑な地形の場合大変だなと思った。	指導教諭評	生徒の理解を確認する。検印を押したり、評定したりする。
-------	--	-------	-----------------------------

つづいて、建築法規の指導に関して各学校の現状報告と意見交換をした。その中で特に強調されたものとして、法の精神を身につけさせる上からも教科ばらばらで取扱っていると指導上一貫性に欠ける。建築士試験等と関連し、科目「建築法規」は独立したものであって欲しい。などがあつた。また、県単位で法規について研究をすすめているのが2県紹介された。

つきに、研究協議会で計画分科会々場におけるアンケート「建築法規の学習指導について」概要を載せておきますので参考になれば幸である。

Ⅱ 建築法規をどの科目で何単位（時間）指導していますか。

科 目	単 位 数	履 修 学 年	学 校 数 (A)	A/26校
工 業 数 理	0.5	2	1	4%
実 習	1	3	5	19%
製 図	1	?	2	8%
建 築 施 工	1～2	3	4	15%
建 築 計 画	1～2	1年 2年 3年 (1校)(3校)(10校)	14	54%

② 建築法規の指導内容について

	指導項目	詳細に指導	概要程度
2・1	延焼のおそれのある部分	55%	45%
2・2	居室の採光	60	40
2・3	建築面積	65	35
2・4	建ぺい率	65	35
2・5	建築確認	22	78
2・6	構造耐力(木造)	35	65
2・7	敷地面積	62	38
2・8	高さの制限	65	35
2・9	延べ面積	50	50
2・10	容積率	50	50
2・11	用途地域	37	63
2・12	その他, 日影規制	製図・構造・施工などで項目がでた部分は指導する。	

以上分科会報告とします。終りにご意見・要望などどしどしお寄せ下さいますようお願い申し上げます。


## 10. 施工分科会報告

県立神奈川工業高校 山 室 滋

今回の報告は、総会の分科会研究協議会で討議した“夏期施工実習研究協議会の実践を通して”の記録と来年度に予定している研究協議会の研究課題をお知らせして、事前の検討を促すものです。

### A. 施工分科会研究協議会の報告

1. 昭和59年夏に実施した施工実習研究協議会の実施内容を出席者に理解して頂くため、全作業を重要事項にしぼってまとめた35分ビデオを視聴してから討議に入った。
2. 分科会出席者のうち、夏期施工実習の参加者は委員の他は3名だけであり、討議に入る前のビデオの視聴は効果があった。
3. 分科会はこのあと、資料№20を基にして、木造、S造、RC造の区分順に夏期研究協議会の担当委員から内容説明や紙面に書いてない苦労話や作業状況などを話してから、各区分ごとに質問、要望を受けるように進めた。
4. しかし、1区切りの木造の部分を担当委員から説明が終っても、出席者からは質問などの声がないので次のS造の説明に移る。

同様にS造からRC造へと進めて、一括質問の形で展開せざるを得なかった。

5. 質問には次の3つがあった。

#### ① “なわ張りのなわはくいのどちら側に張るか”

縄は建物平面位置の輪郭を見やすくするためのもので作業精度はない。ふつう、地ぐいに巻きつけて外周に張っている。縄張りの精度は地ぐい頭部に打ったくぎ頭心を通り心としている。

#### ② “木造の軒げたの口脇墨9mmについて”

小屋組の基準線は、柱心とこう配線（たる木下端）の交点を水平に印した墨（峠墨）とつかの心墨で構成する三角形で、峠墨は軒げた材の上端ではない。たる木は軒げた材に接合するだけの安定だけあればよく、必要以上の欠き込み（たる木欠き）、軒げた材の欠損、労力の無駄はしない。9mmを超える口脇墨としないのが一般的である。

また、最近のもやなどは外材で角取りもよいので、もや材にたる木の取付け位置墨を天端だけに印して、もやの角部にたる木を接合するものもある。

#### ③ “RC造の捨コンクリート打ちの根切りは図面よりも浅いが”

ここでの実習は捨コンクリート上に、逃げ墨、通り心墨、柱・基礎・はりの形状墨を印するのが目的であるので、グラウンドに根切りし、終了後に埋戻しする作業量を最小限にしたためである。

6. 最後に、建築施工実習研究協議会の夏期開催の是非について、意見、希望を挙手で問うたところ、ほぼ全員が次回には参加したいという実施要請があった。

そこで、各学校での実習内容を吟味して、実施時間の累計内で有効に実施する方策を考え、分科会宛希望事項を具体的に申し付けるよう出席者にお願いする。

また、施工分科会として委員会に持ち帰り今後の検討課題とすることを約し、終了した。

B 机上の“建築施工”はどのように進めるか。

以前、施工の教科書を委員会でもとり上げ、内容の検討、補充、修正すべき内容などを詳細に一覧表につくり、昭和52・53年の総会・分科会資料としたことがあります。

① 今までの分科会の研究協議会は、その年度に委員会で作成した資料を総会の当日お渡しして、協議会で討議しております。

来年は“建築施工 はどのように進めるか”という分科会の協議内容をこの紙面でお知らせして、各校で事前に準備して頂きこれを持ち寄ることで熱の入った、中味の濃い研究活動にしたいと考へ企画しました。

② 施工委員会では、“施工の授業について”アンケート調査をしましたが、各校とも同じように、全内容を履習している回答が多いのが現状でした。

施工は、最終学年で履習するところが多く、実施時間も他の学年より少いため、重要度を分析して、“生徒にわかる授業、就職先の作業に役立つ内容の選択等”授業効果を高めて実施しているものと考へます。

③ そこで、授業担当者による“施工”の内容を検討・精選して頂き、実施案を下記の要領で持ち寄って研究協議会の資料とするものです。

資料作りの問合せは、直接神奈川工高の山室までお願いします。

1. 教科書：建築施工 7 実教 工業071

2. 資料：下記の表による。

記

学校名	学年	単位数		
実施内容	順序の入替え	実習書 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> の関連	積算の実施	簡略・実施しない内容
(例) 3・2 水準点・縄張り・水盛りやり方	縄張り・水準点・水盛りやり方	5.建築工事測量実習25, 縄張り, 水盛りやり方	水盛りやり方の積算(住宅)	_____
3・4 足場	_____	_____	_____	概説のみ、労働安全衛生規則を補う。
4 土工・地業・基礎	くい地業, 土工, 基礎	実習26, 地業, 基礎, 実習43, 44 くい地業	根切り, 地業, 基礎(住宅)	_____



## 11. 製図分科会報告

都立田無工業高等学校 赤地龍馬

はじめに 分科会の動向

昭和59年10月から昭和60年9月までの、1年間の製図分科会の動向について報告します。

<昭和59年度>

◎ 第3回(昭和59年度)製図コンクールの運営に協力<昭和59年2月~12月>

<昭和60年度>

◎ 第35回総会(岐阜大会)研究協議会(分科会) <昭和60年6月7日(金), 8日(土)>

◎ 夏季研究協議会(講習会) パソコンの実技演習<昭和60年8月1日(木)~3日(土)>

製図分科会として、手がけたものは主として、上記の三つの事項でした。これら三つの事項について、①第35回総会・研究協議会 ②夏季研究協議会 ③昭和59年度製図コンクール審査結果の順序で、その概要を報告します。

Ⅰ 第35回総会(岐阜・高山大会)

研究協議会(分科会) 議題「建築製図の学習指導について」 参加者 43名

議題 1. 第4回(昭和60年)製図コンクール実施要項について

製図コンクールも、今年で第4回となり、総会の製図分科会に参加の先生方からは、多少の要望が出されたが、大筋において製図コンクールおよび、各課題の設定主旨が理解されており、何らかの形で製図教育の発展に微力ながら寄与しているように思われました。

製図コンクールの運営に関係している委員も同席したが、同じような感想であり、今後一層の精進が必要であることを、同席の委員ともども痛感いたしました。

今回の分科会で、製図コンクールについての要望は、下記の4点でした。

要望 1. 応募作品は、各課題ごとに、各学校(全・定別)2点までであるが、級数の多い学校は、応募作品の増加はできないか。(札幌工高)

要望 2. 課題3の住宅設計で、与条件の敷地設定について、敷地周囲の環境説明とかどんなロケーションの中に住宅を建てるのか明示して欲しい。(鶴見工高)

要望 3. 課題2 配置図を作図するとき、道路から玄関へのアプローチに、生徒が夢が持てるような、敷地条件なり、平面図なりに、工夫が欲しい。(鶴見工高)

要望 4. 課題1 軒先回り詳細図で、部材寸法(軒桁を105×105→120×120)は、雪国など、地方色を考えたものにして欲しい。(勿来工高)

これらの要望については、製図コンクール運営委員会で検討することとし、第4回(昭和60年)製図コンクールでは、実施要項の通りとしました。

各課題の条件設定では、各学年の学習進度を考えながら、授業でやったものを、コンクールに応募することを考慮しているため、やや、物たりない面も出てくると思います。

議題 2. 建築製図検定（主催 全国工業高等学校長協会）について

① 検定試験実施要項までの経緯について

「建築製図検定」の実施についての調査研究報告（「工業教育9」Vol.20, No-117）

報告者 大阪府立城東工高 校長 相川三郎先生

② 建築製図検定試験実施要項の検討 実施要項B4 9枚配布

建築製図検定については、校長協会では前々から「話し」としてはあったが、具体的な形で話題になったのは、昭和59年9月27日(木)28日(金)に開催された「第15回全国工業教育研究大会（土木系・建築系）」の第2日目の、各分科会毎の研究協議会でした。

研究協議会では、相川先生より、前記「工業教育9」掲載の「製図検定についての調査研究報告」の概要について説明があり、意見については、文書などで校長協会宛、連絡を頂きたい旨希望がありました。

その後、相川先生を中心とした、近畿工高建築連盟の先生方で作製した第1回目の「実施案」について校長協会から楠見会長を通して、東日本建築教育研究会主査会に意見を求めて来ました。

主査会の課題内容の意見などを入れて、第2回目の「実施案」についても、第1回目と同様に主査会に、課題内容などについての意見を求めて来ました。時期的に総会（岐阜大会）の前でもあり、各分科会とも分科会の話題としては取りあげましたが、十分なコンセンサスを得ないまま、上記議題として、総会の製図分科会で取り上げ、実施案の資料は、総会参加者全員に配布したような次第です。総会の分科会当日、大変ご迷惑をお掛けしたことをお詫びいたします。

製図検定についての意見は、多数ありましたが、要約すると、次のようでした。

1. 製図検定（校長協会）と東日本建築教育研究会との関係は？

研究会は、協会のPR機関か。分科会として、総会で検討するのは筋違いである。

2. 製図検定の趣旨はどこにあるのか（根本意義）？

教育効果を上げるためか（検定料不要）、商業主義か

3. 製図検定を60年度実施では早い、時間をかけて検討すべきである。

4. 検定の課題がむずかしいのでは？ 合格率はどのくらいを考えているか。

授業の延長での実力検定か、検定のための勉強をさせての合格か。

5. 実施案は「矩計図」であり、矩計図は図面の一部である。建築は総合的なものであるから、もっと総合的な事項について表現する内容にすべきである — 課題内容—

なお、栃木県で実施している「検定試験」の内容について、宇都宮工高 上野武男先生および、福島県の実施内容について、勿来工高 富樫要次先生より、貴重な意見も混じえて発表してもらいました。

製図検定については、上記の意見を校長協会に伝えると共に、時間をかけて十分に検討

をし、ご意見や疑問に対しては、検定試験の内容に反映されなければならないと思います。

## ② 昭和60年度 夏季研究協議会 — パソコンの実技演習 —

夏季研究協議会は、各分科会持ち廻りで、主体となる分科会に応じた内容にすべきであるとの趣旨から、60年度は製図分科会が主体となって、企画せよとの事であった。

しかし、製図分科会としては、パソコンに精通した人数も少なく、各分科会の英知を出してもらう為、各主査にお願いをして、各分科会から主査も含めて3～4名の運営委員を選出して、企画その他の内容についても協力を依頼し、下記の各委員の協力を得ました。

計画分科会 佐藤（墨田工）、門馬（東工大附工）、大間（関東一高）

構造分科会 古谷（田無工）、池田（川崎市工）、遠山（安田学園高）

施工分科会 山室（神奈川工）、内藤（東京工）、村上（藤沢工）、塩山（熊谷工）

製図分科会 遠藤（東京工）、土田（蔵前工）、赤地（田無工） 以上計13名

事務的な雑務などは、製図分科会がやることでスタートしましたが、時期的に冷房設備のある会場ということで、会場の設営に難行し、総会（岐阜大会）の時期には、日程は決定したものの、会場は未定というような状態でした。

東京工高、小野先生を通じて、日本工業大学に打診してもらったところ、会場はもとより、講師の先生までも、全面的な協力が得られ、各委員はもとより、東京工高建築科の多数の先生方の好意と協力によって次のような要項で実施することが出来ました。

1. 内 容：パソコン（PC-9801）の実技演習（初級・中級初歩）
2. 期 日：昭和60年8月1日(木)、2日(金)、3日(土) 3日間
3. 会 場：日本工業大学（東武伊勢崎線 東武動物公園下車）
4. 日 程 1) 第1日目 — 8月1日(木) 受付9:20～9:50
  - ① 9:50～10:10 開講式 記念写真
  - ② 10:10～11:10 施設見学
  - ③ 11:10～12:00 パソコン教育システムの概要例について
  - ④ 13:00～16:30 パソコンの操作について
  - ⑤ 17:00～18:30 教育懇談会（三浦学長より、日工大の教育方針説明）
- 2) 第2日目 — 8月2日(金)
  - ① 9:20～12:00 B A S I C言語の基礎および実習（初級）
  - ② 13:00～16:30 B A S I C言語の応用および実習（中級）
- 3) 第3日目 — 8月3日(土)
  - ① 9:20～11:40 C A I支援ツールの現状と実習（応用）
  - ② 11:40～12:00 質疑応答
  - ③ 12:00～12:30 閉講式 昼食後解散
5. 参加人員 42名（定員40名）

参加者全員に、10項目についてのアンケートをお願いしました。研修会の成果を問う意味で、アンケートの中の「⑧ 今回の研修会について、○印をつけてください」の内容は

- |                       |            |             |
|-----------------------|------------|-------------|
| 1) 期待通りで満足である         | 8 (22.8%)  |             |
| 2) 期待とは違ったが満足である      | 14 (40.0%) |             |
| 3) 研修会としては、普通と思う      | 8 (22.8%)  | 建築科の生徒に活用す  |
| 4) 期待はずれであったが、まあまあである | 1 (2.9%)   | べき内容にして欲しい。 |
| 5) 難しく、全然わからなかった      | 1 (2.9%)   | 初心者には、もっとゆ  |
| 6) その他                | 3 (8.6%)   | っくりと!!。     |

その他の意見①初級、中級のクラス別けをして欲しかった。

②中級程度の習得を期待していた。

③もう少し、初歩を教えて欲しかった。

回収数35、回収率72%の結果であります。また、会場の冷房も含めた諸設備については感謝の感想が記述されており、苦情がなかったことは一応満足であったものとして、今回の夏季研究協議会も、会員の皆様のお役にたったものと理解しております。

これも、各委員はもとより、日本工業大学とのパイプ役を勤めて頂いた、東京工高の小野、遠藤、内藤諸先生、そして、会場、講師の先生など全面的な協力体制を構築していただいた、三浦学長、市川教務課長をはじめとする、日本工業大学の関係教授・職員の皆様様に、紙面をかりて、厚くお礼申し上げます。

### ③ 昭和59年度（第3回）製図コンクール審査結果

製図コンクールの作品応募につきましては、東日本建築教育研究会加盟校以外の建築科のある高校にも、第2回目（昭和58年）より、製図コンクール実施要項を発送し、作品応募を依頼して来ましたが、第3回目（昭和59年）より、下記のように51点（18校）の応募がありました。

従って、この製図コンクールも、東日本だけでなく、全国規模の工業高校建築科の製図コンクールとなった訳で、運営委員一同、意を強くしているところです。

審査結果につきましては、第2回目から「建築士と実務」（オーム社刊）9月刊誌に発表しております。第3回目の審査結果も60年3月号に掲載されました。

この「建築教育ニュース」が、皆様のお手許に届く頃には、第4回目の審査結果が出ていることと思います。今後とも諸先生方の絶大なるご協力、ご支援の程お願い申し上げます。

1. 応募校数 78校（加盟校、全57、定3、加盟校以外 全18、定0）

なお、入賞者には副賞が、入賞しなかった者（優秀賞）にも参加賞が、建設実務専門学校・建築資料研究社のご好意により寄贈されました。

また、入賞作品をご指導くださった先生方のご労苦に対して、建築科に指導教材として、

月刊誌「住宅建築」（建築資料研究社刊）6ヶ月分が寄贈されました。寄贈につきましては、第1回目より継続されております。

## 2. 応募作品数

	作品数・学校数		全日・定時制の別					
	東	西	全	全日	定時制	全	全日	定時制
課題 1	110点	57校	全	106点	54校	定	4点	3校
	24点	12校	全	24点	12校	定	0点	0校
課題 2	82点	44校	全	82点	44校	定	0点	0校
	17点	9校	全	17点	9校	定	0点	0校
課題 3	58点	33校	全	57点	32校	定	1点	1校
	10点	5校	全	10点	5校	定	0点	0校
計	301点 (東 250点 西 51点)							

(注) 東：加盟校 西：加盟校以外

## 3. 入賞者一覧表

賞	課題 1	課題 2	課題 3
金賞	東京工業高校 増山徳郎	高山工業高校 谷口栄治	高崎工業高校 小野里匡章
銀賞	藤沢工業高校 新井俊 豊橋工業高校 鈴木雅也 市立広島工業高校 小久保弘樹	田無工業高校 岡田和宏 半田工業高校 西尾英哲	釧路工業高校 石沢伸一 高山工業高校 谷博樹
	松山聖陵高校 宮下健二 長野原高校 下田宏行 東京工業高校 淡中建人 大船渡工業高校 上部亮二 田無工業高校 中西剛 中津川工業高校 市岡博久 峡南高校 内藤高広	佐織工業高校 伊藤彰洋 大宮工業高校 伊藤勝夫 高山工業高校 栗本智秀 佐織工業高校 佐藤雄二 長野原高校 野口幸敏	市川工業高校 城竹秋一 高山工業高校 門谷康雄 名古屋市立工芸 川口和男 前橋工業高校 伊佐俊昭
奨励賞	静岡工業高校 定時制 大原吉治	東予工業高校 高瀬晶浩	松山聖陵高校 2年生 上松淳 向の岡工業高校 定時制 渡辺昭浩

## 12. ニュースとお願い

1. 昭和61年度の本会の総会・研究協議会は、来春6月6日（金）～7日（土）の両日、福島県において開催予定です。

2. 今年の総会において、はじめて、「一寸一言」を記していただきましたが、あまり回答はいただけませんでした（3通）。来年度は総会の席で「一寸一言」を記して投函していただこうと思っています。これは、本会の活動を盛り上げて行くために会員皆様のご意見やご提案を伺うためのものです。ご協力をお願い致します。（総会の際でなくても結構です。）

なお、今回の回答の内容は、製図検定に関するもの、（慎重にやってほしい。やるからには権威のあるものであってほしいと、分担金（会費）をアップして、事業や研修などを活発化せよということです。ご協力有難うございました。

## あ と が き

「建築教育ニュース」1985年号が出来ました。

今年の各県工高建築教育の概況は、福島県と愛知県にお願ひしました。菊田先生、稲葉先生御多忙の所有難うございました。

最後になりましたが、本部および総会事務局と各分科会主査の先生方の御協力に感謝致します。

1985. 11.

編集委員会

池田（川崎工）、古賀（東工大附工）

松本（葛西工）、堀越（小石川工）